様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：	若手研究（Ｂ）
研究期間：	2006～2008
課題番号：	18700263
研究課題名（和文）	主語の情報連鎖機能と談話構造に関する研究 ―歴史英語から見た言語進化―
研究課題名（英文）	A study on the interaction between subject information and discourse structure: With special focus on the history of English
研究代表者	柴崎　礼士郎（SHIBASAKI REIJIROU） 沖縄国際大学・総合文化学部・准教授 研究者番号：50412854

研究成果の概要：

古英語・中英語期の韻文資料の調査、および、15 世紀以降のイギリス演劇を資料中心とした分析が予定通り終了し、英語という言語の通言語的情報連鎖の研究が可能となった。また、英語だけではなく、非西欧語（西アフリカ・ディダ語と琉球沖縄語史的資料）からの示唆も得ることができ、本研究の可能性を裏付けることができた。本研究の申請段階でも、歴史英語研究から他言語研究への示唆、あるいは、英語とは系統発生的に異なる言語の分析から歴史英語研究への洞察可能性を提示していた。3 年間の研究を通し、両側面を実証研究として提示することが可能となり、結果として言語進化の深層部まで迫れたものと判断している。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 18 年度	1,000,000	0	1,000,000
平成 19 年度	700,000	0	700,000
平成 20 年度	500,000	0	500,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	0	2,200,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：認知科学
キーワード：　認知言語学、談話機能論、英語史、主語、言語類型論、談話分析、語用論

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が米国留学中に取り組み始めた「「好まれる項構造理論」に基づく歴史英語の情報連鎖機能」という個人研究が基礎となっている。留学先大学院から研究費の交付を受けていたこともあり、本研究申請段階において既に国内外で研究論文を刊行しており、その一部は同理論提唱者の著書にも関連論文として紹介されている。また、フィールドワークの一環として調査した西アフリカのディダ語からの示唆も多分にあり、歴史英語研究を他言語との比較で研究を進めることが可能となった。

申請者が本研究に取り組み始めた時点では、国内外を問わずに、「好まれる項構造理論」の通時的妥当性を提唱している研究者は皆無に等しかった。その意味でも、歴史英語研究と「好まれる項構造理論」の有意味な融合は、研究史上初の試みであった。試験的で

はあるものの、過去千年を網羅する英語研究として、「好まれる項構造理論」の通時的意義を提唱する斬新な研究であった。

２．研究の目的

「好まれる項構造理論」の支柱の一つは「形式と情報」の言語普遍的特性の解明である。特に、他動詞主語および他動詞目的語の機能は通言語的に共通であることが先行研究から明らかである。一方、自動詞主語は、当該言語の文法システムにより機能が分かれる傾向にあり、他動詞主語寄りの機能の場合と他動詞目的語寄りの機能に大きく区分けされる。

「好まれる項構造理論」の展開は、フィールドワークに基づく言語調査によるところが大きく、事実、初期の研究史を鑑みると「語り」のテキストを一次資料とする研究が大半であった。近年になると、会話データや死滅した古代言語の資料を分析した研究報告も散見するようになっている。

こうした「好まれる項構造理論」の研究史から明らかなように、元々生きた言葉の機能を分析する手段として用いられる言語理論であり、過去 20 年余りの間に、様々な言語の共時的研究により理論の妥当性が提唱強化されていた。

そこで、本研究では「好まれる項構造理論」の通時的側面に焦点を当て、「形式と情報」の歴史的変化の過程を解明することに主眼を置いた。現在の言語機能は歴史の一側面であり、当該言語の段階的発達を調査することにより、広義には「形式と情報」の進化と見ることが可能となる。

本研究の目的は以下の 2 点に収斂される。一つは、「好まれる項構造理論」の未開拓分野への一歩であり、一つは、歴史言語学研究において注目されることのなかった「形式と情報」の段階的発達の詳述である。

３．研究の方法

本研究を追行するに際に、申請者は歴史英語を研究対象とし、特に他動詞主語と自動詞主語の情報性の考察に焦点を絞った。

歴史英語を研究対象とした理由は以下の通りである。

(1) 英語史には貴重な資料も多く、「形式と情報」の通時的研究に適している。
(2) 一方、理論的且つ実証主義的研究が僅少である。
(3) 希少な実証主義的研究も存在するが、形式言語学に依拠する場合が多く、機能言語学によるものは皆無に等しい。
(4) 「好まれる項構造理論」による通時的英語史研究は研究史上初めてである点。

以上の理由から、本研究は「好まれる項構造理論」の理論的耐久性を通時的に考察するのであるが、分析対象とするテキスト選定も入念に行わなければならない。

本研究では、可能な限り口語性の高いテキストを各時代から選び、他動詞主語と自動詞主語の情報連鎖機能を考察することを目的とした。対象ジャンルは 15 世紀以降の演劇作品を中心とし、それ以前の資料は、口語性の高い韻文を 10 世紀以降から用いることとした。

調査時代区分は 10 世紀、14 世紀、および、15～20 世紀までの各時代であり、英語史を 8 つの時代に分け、段階的発達を考察する計画を立てた。

こうした歴史英語研究からの成果も大切であるが、一言語の分析結果だけでは、理論および分析手順の妥当性を実証しかねる可能性も否定できない。そこで、申請者の研究対象言語の一つである西アフリカのディダ語、および、先行研究に提示されている他言語の共時的分析結果も随時参照するように心掛けた。つまり、どの変化が言語普遍的傾向にあり、どの変化が当該言語に特有の変化であるかを、可能な限り客観的に考察することにも細心の注意を払った。

４．研究成果

研究成果とは、研究実施計画実施中・終了後に如何に成果を纏め上げ、どのような評価を下されるかという時点までをも意味する。以下のセクション５に提示する論文の中でも、出版承諾済みでありながら未刊行のものも多い。また、現在審査中の論文までも含めると、研究成果への反応は今後数年を待たねばならないと判断している。

申請者の研究発表の場が海外中心である点もその一因となっており、研究発表から論文刊行まで数年を要することは止むを得ない事実である。しかし、『近代英語協会』や『香港言語学会』等の学会からは逸早く反応があり、本研究の独自性は相応に評価されていると言える。

特に関心を抱かれた点は、英語史を細かな区分に分け注視、入念なテキスト選定、および、具体的数値を提示した点である。換言すると、本研究を実証主義的研究と位置付ける根拠を確実に提示していることになる。

更に、歴史英語を通言語的視点から考察する幅広いアプローチも上掲学会では評価された。近年、歴史言語学と言語類型論との両分野からの知見を併せ持つ研究も散見するよう

になっている。本研究も、一理論の立場から、同様の調査報告を行った結果、相応の注目と評価を得たものと判断している。

本研究は3年間の集中的調査研究の結果、研究書として刊行可能な質的量的成果を提示できたものと判断している。よって、出来るだけ早い段階で研究書として公開し、識者からの慧眼に触れつつ、今後の研究へ繋げてゆきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　11　件）

① SHIBASAKI, R., "Left-dislocation and argument structure in Abou Dida, an Eastern Kru Language", *Proceedings of the 3rd Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics*, 442-456, 2007, (査読有)

② 柴崎礼士郎、「歴史英語における語順確定と主語の情報連鎖機能に関して」、『第9回日本認知言語学会予稿集』、第9巻、191-194、2008、(査読有)

③ SHIBASAKI, R., "Subject cliticization in English and Japanese: A case of second person forms", *Southern Review,* 第23巻, 113-130, 2008, (査読有)

④ 柴崎礼士郎、「言語生態の多様性」、『言語文化のクロスロード』、(第1章)、13-59, 2009, (査読有)

⑤ 柴崎礼士郎、「「なんか」考―沖縄と東京の対照談話研究―」、『言語文化のクロスロード』、(第1章)、133-158, 2009, (査読有)

⑥ SHIBASAKI, R., "Another look at the development of epistemic meanings in English: A historical collocational approach", *Studies in Modern English* (『近代英語研究』), 第25巻, 63-84, 2009, (査読有)

⑦ 柴崎礼士郎、「歴史英語における語順確定と主語の情報連鎖機能に関して」、『日本認知言語学会(JCLA)論文集』, 第9巻, 328-338, 2009, (査読無)

⑧ SHIBASAKI, R., "Word order fixation and its impact on information flow: Grammatical subjects in Old through Present Day English", *Languages across Time and Cultures* (Linguistics society of Hong Kong), (印刷中にて頁未定), 2009 (June), (査読有)

⑨ SHIBASAKI, R., "From nominalizer to stance marker in the history of Okinawan", *Japanese/Korean Linguistics*, 第18巻, (印刷中にて頁未定), 2009 (Nov.), (査読有)

⑩ SHIBASAKI, R., "On the transition of transitivity in English", *A Festschrift for Minoji Akimoto* (Peter Lang), (印刷中にて頁未定), 2009 (Dec.), (査読有)

⑪ SHIBASAKI, R., "Referential shifting as a case of intersubjectification", *Subjectification, Intersubjectification, and Grammaticalization* (Mouton), (印刷中にて頁未定), 2010 (Jan.), (査読有)

〔学会発表〕（計　9　件）

① SHIBASAKI, R., "What does discourse frequency reveal about grammatical categories?: The case of Japanese personal pronouns", *Organization in Discourse 3: The Interactional Perspective* (*OID-3*), University of Turku, Turku, Finland, Aug.9-13, 2006.

② SHIBASAKI, R., "Frequency as an indicator of semantic change: Towards a unified account of modal verb-adverb co-occurrence in Early Modern through Present Day English", *The 14th International Conference on English Historical Linguistics* (*ICEHL14,* 『第14 回国際英語歴史学会』), Università degli studi di Bergamo, Bergamo, Italy, Aug. 21-25, 2006.

③ SHIBASAKI, R., "Observations of personal pronouns with respect to person hierarchy: A frequency-based approach", *High Desert Linguistics Society 7 (HDLS-7)*, University of New Mexico, Albuquerque, NM, U.S.A., Nov. 9-11, 2006.

④ SHIBASAKI, R., "Chains of information with referential forms in English: A historical discourse perspective", 『近代英語協会第 24 回大会』(於：青山学院大学), 2005 年 5 月 23 日.

⑤ SHIBASAKI, R., "Left-dislocation and argument structure in Abou Dida, an Eastern Kru language", *The 3rd Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics*, Korea

University, Seoul, Korea, July 6-7, 2007.

⑥ SHIBASAKI, R., "The structure-basis of semantic and informational change in English", *The 2007 Annual Research Forum by the Linguistics Society of Hong Kong (LSHK)*, Baptist University of Hong Kong, Dec. 8-9, 2007.

⑦ SHIBASAKI, R., "Frequency as a motivating factor of informational change: A diachronic approach to English", 『言語科学会第十回年次国際大会』(於： 静岡県立大学), 2008 年 7 月 12 日－13 日.

⑧ SHIBASAKI, R., "Structural change as a trigger of semantic change in English: A perspective from argument structure and word order change", *The 15th International Conference on English Historical Linguistics* (=*ICEHL15*,『第 15 回国際英語歴史学会』), University of Munich, Germany, Aug. 24-30, 2008.

⑨ 柴崎礼士郎、「歴史英語における語順確定と主語の情報連鎖機能に関して」、『日本認知言語学会第 9 回全国大会』(名古屋大学東山キャンパス)、2008 年 9 月 13 日－14 日.

〔図書〕(計　0　件)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者
柴崎　礼士郎（SHIBASAKI REIJIROU）
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：50412854

(2)研究分担者

(3)連携研究者